

南三陸町役場庁舎



「マチドマ」 南三陸杉の大屋根の下で

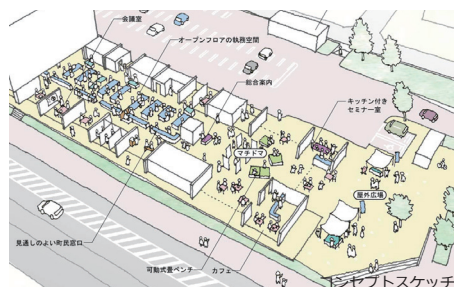
町民・職員・来外者がともに時間を過ごす

建築に求められていたのは、様々な地元への想いが語られる中、単なる施設復旧ではなく、被災者に寄り添ったコミュニティ再生の拠点であり、町全体の復興・活性化であった。この町民の想いを受け、「マチドマ（まちの土間）」と名付けた交流・協働空間を設けることとした。

町民が気軽に訪れ、ハイサイドライトからの自然光にあふれて風が通り抜け、里山の木のぬくもりが感じられる大屋根の下で居心地の良い、穏やかで日常的な時間を共有する。そんなプリミティブな公共空間を目指す一方、今も町全体で進む復興に向けた多様な人々の協働の受け皿として、未来のまちづくりを支援する場を意図した。



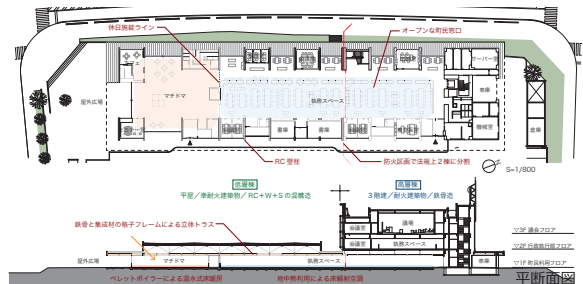
南西側からの航空写真



コンセプトスケッチ

平屋のワンルームに町民サービス機能を集約

マチドマや町民窓口はすべて1階に集約している。これにより、高齢者や車いす利用者等にとっても使いやすいバリアフリーな庁舎となるほか、どこに何があるのか一目でわかる分かりやすさを実現した。また、行政サービスとしてもオフィス空間をワンルームで確保でき、窓口連携や将来のレイアウト変更もしやすい他、セキュリティレベルの異なる町長室等の執行部機能（2階）／議会機能（3階）を別のフロアとすることで、管理しやすい構成となっている。さらに平屋であることを活かし、上部のハイサイドライトから自然光を取り入れ、中間期には自然通風も確保した心地よくエコな空間の実現に加えて、平屋とすることで荷重を軽くし、土間スラブの直接基礎としてコスト的なメリットも獲得している。



平断面図



様々な使い方ができる屋内広場「マチドマ」



見通しの良いオープンフロアの町民窓口

木質格子梁を強調した鋼木格子立体ハイブリッドトラスをRC壁柱で支えて特徴的な空間を実現する

デザインコンセプトは、南三陸町に住む人々が親しみやすい庁舎として、人々が馴染み深い文化や材料をデザインとして取り入れることで「新しくも懐かしい」「新鮮でいてどこか落ち着く」感覚を目指すということであった。これは、昔ながらの日本家屋の雰囲気の木造格子組や土間がキーワードとなっていた。

デザインコンセプトに対して構造は、マチドマの天井架構を木質格子梁とし、この格子を特徴的なものとするため、ハイサイドライトをもつ腰屋根架構は余分な部材を極力排し、窓部を縦材のみとしてマチドマに差し込む柔らかな光あふれる空間とすることを考えた。さらに、2.2mの腰屋根の懐の天井架構を格子梁と一体として利用してすっきりと見せるため、格子梁から鉄骨の斜め材を3次元に架けて鉄骨上弦材と繋げ、鋼木格子立体ハイブリッドトラスを形成して、鉛直だけでなく水平変形を抑制して格子梁を軸力中心の部材とすることで梁成を最小化している。鋼木格子立体ハイブリッドトラスは、外部に跳ね出す3mの底と連続させた3.2mグリッドの集成材格子フレーム下弦材とH形鋼の上弦材を斜材の鋼管を立体的に繋いだ構成とし、町民の交流する「マチドマ」を光があふれ、軽快で開放的な空間としている。さらに、格子フレームは、南三陸産すぎによる燃え代設計の500mm×200mm集成材を鉄筋継手工法による剛接合部によりすっきりとした納まりとし、より象徴的で、町民に親しみのある空間を実現している。

格子梁を支える架構は、従来の門形の鉄骨造や鉄筋コンクリート造ラーメン架構のボード仕上げとすると屋根との一体性を欠き、格子の良さ、素材の良さを消してしまう。そこで、荒々しくも自然の素材感を創出するソリッド、かつ、フラットで力強い300mm厚さの打ち放しコンクリート仕上げの壁柱で支持している。格子梁の杉集成材、打ち放し壁柱のコンクリート型枠は、地元南三陸産を利用している。

これらにより、意匠と構造が一体となって、地元の素材の良さを引きだし、より親しみのある特徴的な空間を実現することができた。

